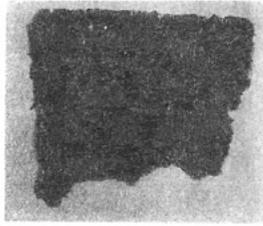
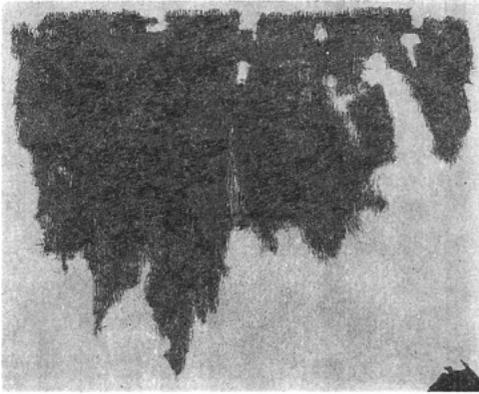


(資料紹介)

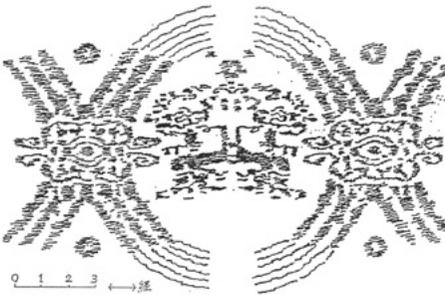
挿図1、2の二片の綾は古裂帖二七二号(大正一四年作製)に貼付されており、昭和六一年に同帖を調査の際発見したものである。二片中の一片は長さ一二・五糎、巾一〇糎、また一片は長さ六糎、巾五・二糎。ともに茜色の平地変り綾文綾で、もとは一続きの裂であったと思われる。文様は三重のヨロケ線による円圈内に動物をシンメトリックに向き合わせた構図である。動物の一部や副文の大部分など不明の部分が多いが(挿図3)、この綾文で最も注目したいのは、三重円圈が隣接のものどう



挿図1



挿図2



挿図3

し、花文を仲介として繋っていることである。このように、円文を独立させずに上下左右と連続させ、接点を種々な装飾文で結ぶ形式は、古代ペルシャや中国の織物文様には類見されるが、なぜかわが上代染織には殆ど採用されず、僅かに中倉の竹映の縁の双鳥連珠円文の連続文様の経錦(書院部紀要一三号「正倉院の錦」三六図)が今までのところ唯一の例であった。しかもそれすら同文錦が敦煌で発見されているから(「セリンディア」四卷CXVII I)、あるいは中国製かもしれないのである。本件の綾もまた日本製と断定し得る根拠はないが、ともあれわが上代染織中非常に珍しい連続式円文の、貴重な新発見例といえることができる。

(松本包夫)